

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究（第3年次）

— 国語力向上と教師の授業づくりとの関連 —

研究代表 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹
附属世田谷中学校 笠井 正信

目 次

1. はじめに	笠井 正信	2
2. 研究の内容		
2. 1. 1. 『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」 のイメージ図を活用して	福田 淳佑	3
2. 1. 2. 『学年段階に応じた「国語力」（国語教育の重点の置き方） イメージ図の具体化案』	笠井 正信	3
2. 2. 古典学習の授業実践研究		
2. 2. 1. 研究の方向	宇佐見尚子	4
2. 2. 2. 中学校における古典学習	野中三恵子	4
2. 2. 3. 高校における古文学習の実践報告	杉本 紀子	4
2. 2. 4. 高校における漢文学習の実践報告	西村 論	5
2. 2. 5. 高校における古典学習の実践報告	宇佐見尚子	6
2. 3. 現代文（文学、批評、評論）学習の問題点と課題		
2. 3. 1. 教材開発の試みが拓く国語力	千田 洋幸	7
2. 3. 2. 新たな教材開発 吉野秀雄 歌集『寒蟬集』	鈴木 芳明	7
2. 3. 3. 過去と現在とのつながりを意識する読解	日渡 正行	8
2. 3. 4. 報道記事・法律の条文を読む——脳死と臓器移植をめぐる	若宮 知佐	8
2. 3. 5. ことばの差異に敏感になる	岩瀬 華子	9
2. 3. 6. 菊池寛「形」を読む～比較を通して表現の特徴を考える～	渡邊 裕	9
2. 4. 言語生活・言語体系の学習に関する問題点と課題		
2. 4. 1. 漢字指導について	愛甲 修子	10
2. 4. 2. 言葉に関する指導について	石川 直美	11
2. 4. 3. 音声言語指導から表現指導への実践の進展	浅田 孝紀	11
2. 4. 4. 海外帰国児童への日本語の音声言語適応をめざした授業実践として	岩浅 健介	12
2. 4. 5. 帰国学級における「話す」・「聞く」について	表 賢司	12
2. 4. 6. まとめと課題	中村 和弘	13
2. 5. 読書活動・情報活用と「国語力」の関連についての授業実践研究		
2. 5. 1. 学校図書館を使いこなすための授業単元	福田 淳佑	13
2. 5. 2. 「ファンタジーを味わおう」	浅見 優子	14
2. 5. 3. 「私のおすすめのこの1冊」	井上 陽童	15
2. 5. 4. 読書ポスターのとりくみ	渡邊 裕	15
2. 5. 5. 問題点と課題	笠井 正信	16
3. 今年度（最終年度）の成果と今後の課題	大熊 徹	16
学年段階に応じた「国語力」（国語教育の重点の置き方）イメージ図の具体化案		18

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究（第3年次）

— 国語力向上と教師の授業づくりとの関連 —

研究代表者 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹、東京学芸大学附属世田谷中学校 笠井 正信
研究同人 千田洋幸、黒石陽子、山田有策、佐藤正光、北澤 尚、石井正己、宮寺庸造、中村和弘（東京学芸大学）木下ひさし（成蹊小学校）小山恵美子（帝京大学）福田淳佑、井上陽童、吉岡裕子（附属世田谷小学校）、中山美由紀（附属小金井小学校）浅見優子、古谷理恵、菅家麻里子、岡島玲子（附属竹早小学校）岩浅健介、表 賢司（附属大泉小学校）野中三恵子、扇田浩水、渡邊 裕、村上恭子、鍋島尚子（附属世田谷中学校）石川直美、愛甲修子、工藤哲夫、杉本紀子、西村 諭（附属国際中等教育学校及び附属高等学校大泉校舎）日渡正行、宇佐見尚子、浅田孝紀、佐久間俊輔、中山 至、藤 千恵、若宮知佐、鈴木芳明（附属高等学校）岩瀬華子（都立駒場高校）

1. はじめに

1. 1. 研究の目的

本研究の研究主題は「国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究」である。本年度はその研究の第3年次にあたる。また本研究は、附属学校教員及び外部私立学校教員と大学の教科教育及び教科専門科目担当教員との連携を図り、実践と理論の統一を図ることが大きなねらいである。

1. 2. 研究の進め方

第1年次における「国語力の分析」「教師の授業作り」に関わる基礎的な研究をふまえ、第2年次は国語科カリキュラムづくりのための実践とその検討を行った。第3年次は、まとめとして各グループによる「実践の評価」を通して、国語力向上と教師の授業づくりの力との関連についての検証を行うこととした。これはさらに教員養成（現職研修）プログラムの提案に向けて検討する方向を持っている。各グループごと（目標論的な追究のグループ、内容論的な追究のグループ（文学や評論などを読むこと、古典などの言語文化の学習、言語生活や言語体系の学習に分かれて）、方法論的な追究のグループ）に実践を振り返り、「実践の評価」検討を通して国語力の構造化と実践を結びつける検討を行ってきた。

1. 3. 授業づくりのシステムを目標と内容と方法の関係から構造的に構想する提案にむけて

言語技術だけ、作品だけという従来型の国語教育観から学び手を支える「授業」の発想のもとに授業づくりのシステムを検討し、目標と内容と方法がかみ合う構造的な授業作りの提案を構想している。どのような話題や題材について、どのような学習活動（言語活動）を通してそのような国語力を育むのかを明確にする授業であるためにはどうしたらよいか。またそれぞれの学年や発達の状況に応じた内容や活動、そして目標の具体的なあり方などを実践を通して検討を進めた。

1. 4. 今後の方向

昨年度の「今後の方向」にもあるように、今後、特に教師の力量が問われる。本研究を教員養成や現職研修のカリキュラムに関連づけることをめざしたい。そのためには国語科の教科構造を明確にし、授業づくりやカリキュラム開発に生かせるようにし、教師の授業づくりの力の向上を図ることで教員養成カリキュラムとの関連を図ることになる。

（附属世田谷中学校 笠井正信）

2. 研究の内容

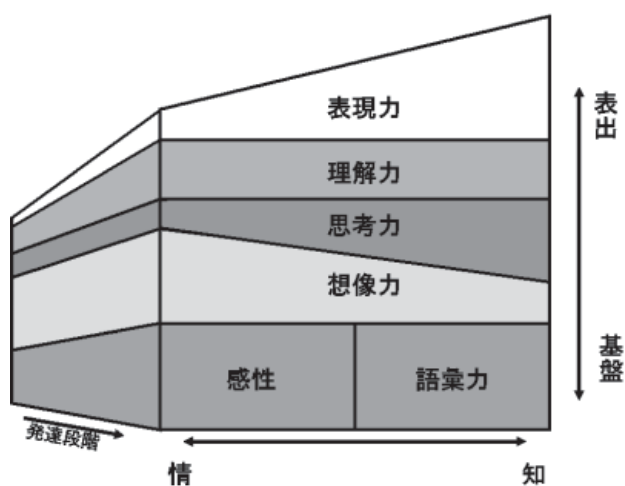
2. 1. 1 『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」』のイメージ図を活用して

プロジェクト研究Aグループでは、平成16年2月3日に出された文化審議会答申の中で、『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」』として示されたイメージ図をもとに、独自のイメージ図を作成し、発達段階に応じた効果的な指導のあり方を考えてきた。

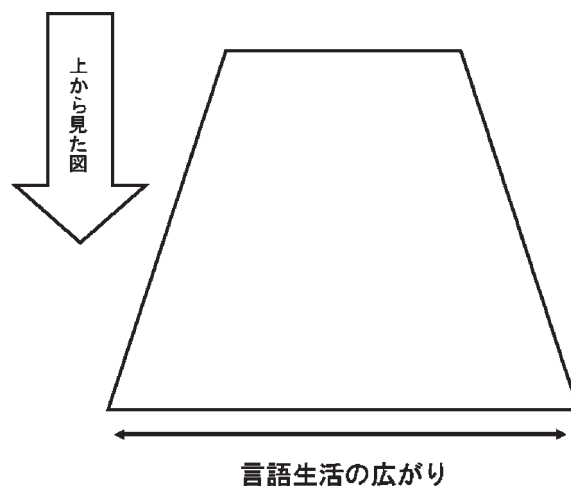
横軸を情と知、縦軸を基盤と表出と設定し、奥行きを発達段階としている（図1）。そして、第四の視点として『言語生活の広がり』がある（図2）。これまでの研究の成果から、縦の積み重ねだけで、言語生活は広がっていかないと考えたからである。

この図を用いることで、目の前の児童・生徒に必要な力は何かを教師は分析をすることができた。例えば、児童の作文を評価し、課題を感じる。その児童の何が課題であるのか、それは語彙が足りない故なのか、それとも、文章の論理構成なのか、作文という表出されたものの背景が、この図を活用していくことで見えてくるのである。そして、よりその児童にあった指導を工夫していくことが可能となるのである。

そして今年度は、それぞれの力における具体的な学びの姿を明らかにしていくことに取り組んだ。



(図1)



(図2)

(附属世田谷小学校 福田淳佑)

2. 1. 2. 『学年段階に応じた「国語力」(国語教育の重点の置き方)イメージ図の具体化案』

後掲の表は、『学年段階に応じた「国語力」(国語教育の重点の置き方)イメージ図の具体化案』である。

第2年次に作り上げた「イメージ図」をもとに具体的にそれぞれの発達段階に応じた「国語教育の重点の置き方」を検討した。例えば、国語力からの視点である「表現力」も「進んで表現する力」から「工夫して表現する力」さらに「適切に表現する力」と小学校のそれぞれの段階に応じた「表現力」の具体的な姿をあてはめてみた。用語は学習指導要領の登場する文言をキーワードとして取り上げ、重点化の意図を理解しやすくしたものである。言語生活の広がりも学年や発達段階に応じて「身近なことや経験したことの世界」から「国際的な世界、及び生涯にわたって国語を尊重し向上を図る生活を送る世界」という広がりとして位置づけている。また、学習指導要領には「言語活動例」として登場する話す・聞く・書くさらに読む活動をそれぞれの段階に位置づけてみた。このことは、授業作りの上でも指導のねらいをしぼって、どのような話題や題材についてどのような活動をするを通してどのような言葉の力が培われるのかを具体的にすることことをねらっている。環境問題を取り上げる場合でも、小学校低学年においては「身近なことや経験したことの世界」のでき

ごととしての環境問題を取り上げることになる。そのうえで事物の説明をすることを通して、進んで表現する力を培うことができる授業を構想し実践することになる。しかし中学 3 年生ともなれば、「社会生活の中で立場や考え方の違う相手と共生する世界」での環境問題となる。そうなれば自ずから世界規模や簡単には現在の生活を否定するようなことでなかなか実現しない原因と向き合うような学習が考えられる。そこで、説得のための弁論を通して自己を向上させる理解力を培い、考えを深めて表現する力を育むことができる。

今後、この具体化案を実践を通して実際の児童・生徒の姿を重ね合わせることで修正、改良を図る必要がある。しかし、このような構造的な座標軸を持つことで、多様な教室の現実に対処できる教師力の向上を図ることができると考える。大枠としての「国語力」のイメージ図を教師集団が共有化し、授業を評価し授業改善に努める力量を高めなければならないと考える。

(附属世田谷中学校 笠井正信)

2. 2. 古典学習の授業実践研究

2. 2. 1. 研究の方向

生徒が古典に対する苦手意識を持たずに、古典の作品に対して心を開き、親しむ態度を培うには、どのような授業が有効であるのか、また「伝統的な言語文化の学習」としての古典学習を目指したときに、新たにどのような授業の可能性が見えてくるかを、小・中・高それぞれ対象とする生徒を意識して、授業実践から考えたい。

(附属高等学校 宇佐見尚子)

2. 2. 2. 中学校における古典学習

小、中学校の学習指導要領に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が入り、保護者用パンフレット（文部科学省作成）には「伝統的な文化に関する教育を充実します た例えば、国語の時間では… ・小学校で古文・漢文の音読を行います」とある。小学校での古典学習が、中学校の学習の前倒しであってはいけない。中学生は、小学校の高学年で学習した教材を見かけると拒否反応を起こす。無論中学校で魅力的な学習が展開できればよいわけだが、小・中学校の連携を意識して学習内容を設定する必要性は益々重要になる。中学校の古典入門で「竹取物語」を扱うことが多いが、物語の壮大さ、構造、構成は測り知れないものがある。小学生にも、教え込む古典学習ではなく、音読で親しみを感じられるような古文・漢文を示したい。中学校の教師は高校の教師から「中学生を古典嫌いにさせないで欲しい。」と言われる。「伝統的な言語文化」の学習を、児童・生徒にとって、古典を楽しめるもの、生きる力を支えるものとして位置づけていく必要があろう。

(附属世田谷中学校 野中三恵子)

2. 2. 3. 高校における古文学習の実践報告

「高校生は果たして古文を苦手としているのか」昨年度の授業実践を通して生じた疑問がこれである。昨年度は古文と漢文のつながりを意識した単元を設定し、和歌と漢詩の比較という学習活動を中心に試験的な授業を行った。その学習を通じて生徒の様子を観察してみると、古文や漢文を苦手だとしていた生徒も自ら思考した上で作品を解釈し、発言できる場面があった。もちろんこの単元だけで彼らの苦手意識を払拭できたとは考えられないが、少なくとも「苦手だ」ということを意識せずに学習に取りくむ形が見えたように思われた。それをふまえて教材の選定とそれを活用した単元設定の仕方次第で、高校生に古典に対する苦手意識を強く感じさせないような授業が展開できるのではなかろうかと考え、今年度は第 1 学年・第 3 学年において古典の授業を実践した。以下に 1 学年での『伊勢物語』の授業の概略を示す。

[第1学年]

稿者の担当する「大泉校舎」の生徒は全員が帰国生である。そのため、生徒によっては古典の文章を全く読んだことがないという者もあり、生徒間の既習歴がまちまちである。そうした中で今年度は特に在外歴の長い生徒のクラスで次のような教材を取り上げ、授業を行った。

○『伊勢物語』『芥川』全4時間(2学期)

教材の選定に関しては、生徒の学習の進捗のスピードと興味の在処を鑑みて行った。1学期の学習を通じて、在外歴が長い生徒が多く読み方や文法の理解に時間がかかるため、地道な積み上げ学習が必要である一方で、日本の歴史や古典の風俗には強く興味を示すことが分かった。1学期には歴史的仮名遣いの読みに慣れること、動詞の活用の学習などが中心となり、あまり長い文章や歴史的な背景を理解しなければならない文章を取り上げるのが困難であった。しかし、2学期になって学習が進んだこともあり、歴史的背景を鑑みて読むこと、また「芥川」を「東下り」との関連で読むことによって、『伊勢物語』の世界が面白く読めると考えられたため、2学期に『伊勢物語』を教材として取り上げることとした。

授業の内容は1学期に引き続き、まずは歴史的仮名遣いを確実に読めるように音読に時間をかけた。自信を持って読めるようにならなければ、結局の所辞書も確実に引けず、現代語訳もままならない。古典のみならず日本語に苦手意識を持つ生徒もいるので、まずは読むことに集中して自信をつけさせることを目的とした。さらに音読が確実にできるようになった後、古語辞典を引きながら古文単語の意味を調べ、文中の語はどの意味にあたるのかを二人一組で検討させるような作業時間を設けた。この作業によって単語の意味と文脈を検討しながら読み進めることができた。一方で、内容の理解に関しては、まず『伊勢物語』の文学史的な背景について解説する時間、便覧などで概略を知る時間を授業内に設け、歴史的背景とのつながりを意識して読むことを指示した。そうすることで、「鬼」と「女」との関係や「男」がやがて「東下り」において「身をえうなきものに」思っ東に下っていくことなどの流れがスムーズに理解できたようであった。生徒たちの反応としてはやはり文法事項の学習には拒否反応も見られたが、「女」がなぜ男のもとから連れ去られたのか、それが「鬼」によって食われたと語られていることには非常に強い興味を示していた。

(附属高等学校大泉校舎 杉本紀子)

2. 2. 4. 高校における漢文学習の実践報告

昨年度は、古文と漢文とを関連させた授業実践を模索した。授業者としては、私たちの祖先が、発達した中国の文化や思想を吸収し、日本文化を築き上げようとしたのは漢文を通してであったということ、いくつかの試験的な授業実践を通して再確認させられた。このことは、生徒たちにも多少なりとも伝わったのではないかと思われる。

しかし、それでもやはり、生徒たちの多くは古文や漢文に対するアレルギー反応を示すようである。本校「大泉校舎」の生徒全員が帰国生であることも、その理由の一つであろう。漢文にいたっては、漢字が苦手な生徒たちにとって、もはや異国の言語で書かれた外国語に等しい。

そこで今年度は視点を変えて、漢文を現代的な視点で読むことと、漢文的思考を追体験することに重点を置いた授業実践を試みた。そもそも古文や漢文、つまり古典を読むことの意義は、ものの見方や考え方、感じ方を広くするとともに、自己を見つめ直すことにある。生徒が漢文を現代的な視点で読み、追体験することによって、漢文を通して自己を見つめ直すことを図ったのである。具体的には、第3学年を対象に、よく知られた説話でもある『莊子』の「胡蝶の夢」と、「知魚楽」で知られる「濠梁の想い」を教材として取り上げた。ここでは「胡蝶の夢」の授業内容を以下に示す。

○『莊子』「胡蝶の夢」全1時間（2学期）

「今いるこの世界が、夢ではなく現実の世界であることを証明せよ」（あるいは、「今いるこの世界が、現実ではなく夢の世界であることを証明せよ」）

授業の冒頭で上の問いを提示した。生徒たちはいろいろな答えを出し、それぞれについて妥当性があるか検討したが、決定的なものではなかった。中には数学の証明方法を用いて答えを出そうとする生徒もいた。そこでさらに問いを提示した。「あなたの隣にいる人は、自分（私）のしている世界と同じ世界を見ているのだろうか？」これは例えば、自己の認識している赤色と、他人の認識している赤色は、同じ色なのかどうか、そしてそれを確かめる方法があるのだろうか、という問いである。これらの問いに対する解答を模索する中で、生徒たちは、現実とは何か、人の心とは何か、そしてそれはどこにあるのか、といった哲学的とも言える問題を自己と結びつけて考えていた。

だいたいの答えが出尽くした後で、「胡蝶の夢」の本文を読んだ。この文章は非常に短く、難しい句法も無い。上記の二つの問いとの関連からも、表面的な内容はすぐに理解できたようである。しかし、その思想はなかなか深く難しい。生徒たちも「物化」の解釈に苦労しているようではあった。しかし、本文の内容である夢と現実の別だけでなく、自己と他者の別、さらには、生と死の別といったことにまで発展させて、この文章を読み深めていった。漢文の文章を現代的な視点で読み、漢文を通して自己を見つめ直していたと言っても良い。漢文と古典の関連だけでなく、漢文と現代文とを関連させた授業の可能性も見えてきたように思われる。

（附属高等学校大泉校舎 西村諭）

2. 2. 5. 高校における古典学習の実践報告

今年度、高校二年生を対象に、漢文の授業において『剪灯新話』「牡丹灯記」を読解した上で、古文の授業において、その翻案小説である『伽婢子』「牡丹灯籠」を取り上げて、比較する授業を行った。漢文の授業は中山、古文の授業は宇佐見が担当した。授業内容は以下の通りである。

○「牡丹灯記」と「牡丹灯籠」全6時間（2学期）

最初に、漢文の授業で二時間かけて、「牡丹灯記」の中で古文と関連のある前半部分を読み、その内容をふまえて、古文の授業でも二時間「牡丹灯籠」を取り上げ、それぞれのあらすじや登場人物などを確認した。その上で、古文と漢文にはどのような違いがあるのか、またその違いにはどのような背景や理由があるのかを、グループで話し合い、考える時間を一時間設定した。そして、最後の一時間は、自分なりに「牡丹灯記」と「牡丹灯籠」の違いについて考察した内容を八百十字の原稿用紙にまとめる時間とした。

「牡丹灯記」を教材化するにあたっては、生徒が本文を読みやすいよう、なるべく注を詳しくし、古文で取り上げられていない後半部分に関しては、訳で内容を紹介した。また古文の内容に関しても、「牡丹灯籠」の内容を確認した後、古文と漢文で違いを話し合う際には、話の全体像がつかみやすいように、参考資料として「牡丹灯籠」の口語訳を配布した。

今回の実践を通して、作品の内容を読解した上で、もう一度本文を振り返り、全体像を捉えることの重要性を改めて実感した。話し合いやまとめの時間を確保したことで、もう一度それぞれの生徒が作品の違いについて感じていたことを相対化することができ、また、本文を丁寧に読み直そうとする姿勢が見られた。高校においては、話全体を新たな視点で見つめ直し、より深く作品の本質に迫ることを目指したい。

最後の時間に生徒がまとめたものを見ると、二つの作品を比べることで、その違いから「文化の違い」を感じ取った生徒が何人かいた。物語を書く際の「考え方」の違い、それぞれにどのようなことが強調されているのかなど、生徒一人一人が自分なりの視点で、様々な分析を行っていた。また、古文と漢文を対比することで、漢文の特徴である「簡潔さ」に気づき、翻案した古文においては、漢文において簡略に記されているため、内

容的に抜け落ちている部分が補われ、心情などがより細やかに表現されているという点を、本文から根拠を挙げて、論じている生徒もいた。翻案小説である「牡丹灯籠」の特徴として、和歌が大変効果的に用いられていることに注目しているものもあった。関連のある中国と日本の作品を比べることで、少しでもそれらの根幹に思いをはせ、考えることは大きな意味があるように思われた。話し合いの時間を一時間とったことで、最初は書きづらそうにしていた生徒も、古文・漢文のプリントをよく見ながら、少しずつでも自分が気づいたことをまとめようとしていた。限られた授業時間の中ではあるが、焦らずにじっくりと考えさせ、まとめる時間をとることが、作品世界について深く考えるためには不可欠であると感じられた。高校においては、古文と漢文、古典と現代文で関連を持たせた授業を行い、対比することで、よりそれぞれの本質を深く掘り下げ、新たな「気づき」のある授業が構築されるのではないかと思われる。今後もより広く、深く古典を考えることのできる授業の可能性を模索していきたい。

(附属高等学校 宇佐見尚子)

2. 3. 現代文(文学、批評、評論)学習の問題点と課題

2. 3. 1. 教材開発の試みが拓く国語力

「価値ある〈抵抗〉」をキーワードとして実践と研究を積み重ねてきた本グループの作業も、3年目を迎え、その到達の水準が試されることとなった。個別の授業の内容に関しては以下の報告を参照していただきたいが、読解に困難がともなう文章・作品との対峙を回避しがちな最近の学習者の傾向に対して、価値ある思想やテーマが難解さの奥に秘められている教材をあえて導入し、独自の単元を構想する試みは、一定の成果を挙げ得たと考える。ここで言う〈抵抗〉は、作品の時代が現在と隔たっていることによる時間的な〈抵抗〉、自己の経験や思考と齟齬をきたす内容が含まれていることによる文化的・社会的な〈抵抗〉など、さまざまな観点から設定されうる。学習者は、そのような、「言葉」そのものとしてあらわれる〈抵抗〉と出会い、格闘し、その奥深くに分け入る体験を経ることによって、この社会を充実して生きていくための言語力——すなわち理解力、表現力、思考力、想像力、さらには言語文化を担う力、等々を身につける契機を得たものと思う。

今後の課題としては、新しい教材開発の試みが、学習者のことばの力の育成と具体的にどのように繋がるのかを明らかにすることが挙げられるだろう。ただし、今回のような教材を扱った授業の場合、短期的な評価のみで学習目標の達成を云々することはできない。中学校の3年間、あるいは高等学校での3年間といった長期的な視野に立って、今回の試みが学力の向上にいかに関与し得たのかを見取るような視点が要求されるだろう。また一方で、現実の授業では、〈抵抗〉を内包する教材を学ぶモチベーションをいかに高めるか、有効な手立ても必要となる。学習者の関心を引きつける授業の導入、資料や副教材の使用など、授業の個別の場面において、教材の価値を高めるための種々の工夫が必要であることも、これから考えていかなければならない課題であろう。

(大学 千田洋幸)

2. 3. 2. 新たな教材開発 吉野秀雄 歌集『寒蟬集』

B2グループ(現代文《文学・批評・論説》)では、「価値ある〈抵抗〉」をキーワードにして新たな教材を開発し、実際にそれぞれの学校で授業実践を行って来た。文体や内容が多少難しくとも、学習者に問題意識を植え付け、その教材を通して、新たな価値観や人生観を獲得させることをねらったものである。

そこで私は、近年ほとんど教科書に採用されなくなった歌人吉野秀雄の歌を研究し、実践することにした。具体的には彼の第四歌集『寒蟬集』の「玉簾花」^{かんせん}「彼岸」^{たますだれ}に収められた、妻はつ子との死別を詠んだ一連の歌である。初出は、昭和21(1946)年12月に、小林秀雄が実質的な編集長を務めていた、文芸誌「創元」創刊号に発表された「短歌百余草」で、それらの歌の中から私自身が、高校生にぜひ読んでもらいたいと思っている

二十首を選び、解説を施したテキストを使って授業を行った。

この教材を選んだ理由は、近年特に 2 年生用の韻文関係の作品で、『山月記』や『ころも』に匹敵するような、本格的で重い教材を開発する必要性を感じていたからである。それは、思春期の彼等にとって最も大切なことは、自己を深く内省し、自分自身を見つめ直すことにあると思っているためでもある。

愛する妻の臨終に際して、夫としての吉野秀雄は激しく動揺するが、一方歌人としての吉野秀雄の目は妻や彼自身そして子供達の心の苦悩や葛藤を客観的に冷静に眺め、それら家族の赤裸々な姿や心のあり様をもの見事に歌の中に写し取っていく。そこには、歌人にとって歌とは何なのか。命や生きることの意味、愛することとは何か。家族や夫婦はどうあるべきかといった、我々が現実^{なま}にこの世に生きていくための生の諸問題を、読む側にぐいぐいと突きつけて来る迫力がある。研究授業では、ご遺族の方や吉野秀雄の直系の短歌会である「砂丘」の主宰者にもお越し頂き、関係者の生の声を話して頂いたのだが、学習者には、文学や芸術がいかに人生と密接な関わり合いをもっているかということを実感させ、彼等の人生観にプラスになったのではないかと考えている。

(附属高等学校 鈴木芳明)

2. 3. 3. 過去と現在とのつながりを意識する読解

ことばは単独では生じず、共時的・通時的なつながりを持って成立している。日常の中で現代のことばを使って表現や読解を行うとき必ずしも意識されているわけではないが、読みやすい文章だけを読み自分の語彙や知識のみに限られた表現を繰り返していても、ことばがつながっていることへの意識は芽生えない。そこで抵抗を感じることばに接することが必要になるのである。特に、過去とのつながりを意識するためには、形式的に現代とは異なる教材を読むことが有効である。読む際のもどかしさを乗り越え、過去と現在とのつながりを意識してもらうことで、高校生らしい国語力が育まれるのではないだろうか。

過去と現在のつながりを意識させる教材として、高山樗牛「美的生活を論ず」を選んだ。「美的生活を論ず」は明治34年、『太陽』に掲載された評論であり、そこで展開された本能の満足こそが幸福に結びつくという主張は、個性を重視するロマンティズムや人間の本能に目を向けていく自然主義に多大な影響を与えたとされている。そのような明治時代の文芸思潮の流れを考慮しないとしても、旧字・旧仮名・漢文調で書かれたこの文章は、高校三年生が読むには難しい教材である。しかし、まずは文章の形式としての難しさを乗り越えて読解することで、明治時代の評論で述べられていることも、ことばでも思想でも現在と隔絶したものではなく、われわれの社会に受け継がれているものであることが理解できるはずである。

本単元では、明治時代の文章を現代のわれわれが読解するということを目標とし、当初は形式上の問題を克服する授業をおこなった。しかしながら、生徒間の漢文などの知識の差がそのままこの文章の理解の差になってしまったところもあり、「適切な抵抗」として教材を活かすことができなかった。明治の文章の抵抗感が生徒たちの思考をより深めてくれることを確認しながらも、抵抗を適切なものとしていく導入や補助の方法にまだまだ工夫の余地はありそうである。

(附属高等学校 日渡正行)

2. 3. 4. 報道記事・法律の条文を読む —— 脳死と臓器移植をめぐる

新聞記事を読んで要約するという活動は、これまでも度々行ってきた。現代社会を生き抜いて行かなくてはならない生徒たちにとって、新聞等の生きた「現代文」を読みこなし、そこから自分の意見を構築していく能力は必須であろう。しかし、このような活動は個々の作業で終わってしまいがちで、授業としての発展性がなく、その活動によって得られる国語力にも限界があるとの感を拭えないでいた。今回、生徒たちにとって 1 学期

末にあたる平成21年7月に、臓器移植法の改正案が衆参両院で可決され成立した。これをよい機会だと考え、高校1年生の「国語総合（現代文分野）」で以下のような授業実践を行った。

まず、夏休みの課題として「脳死・臓器移植」をめぐる新聞記事を集めさせておき、2学期最初の授業で、それらの新聞記事に対して要約と感想をそれぞれ200～300字で書かせた。そして、日本における「脳死・臓器移植」のこれまでの経緯について教員側からレクチャーしたのち、小松美彦、中山太郎らの文章の他、脳死臨調最終答申からの抜粋や臓器移植法の条文そのものをクラス全体で読んだ。さらにそれらを踏まえたかたちで、「脳死を人の死と考えるか、否か」「脳死臓器移植は推進すべきか、否か」について、最初はグループで討論し、最終的にはクラス全体で討論した。その際、自分の意見にとらわれず、肯定派・否定派それぞれの根拠を挙げ、反論を想定するようにした。最終的に、自分の意見を文章化しこの単元の活動のまとめとした。

脳死・臓器移植は、現代社会、生物、保健といった複数科目を横断するテーマだと考えられるが、ここでは

- ① その文章（記事）を書いている「筆者」の立場や表現意図を汲み取りながら読むことができる。
- ② 根拠を明確にして自分の意見を述べることができ、さらに自意見への反論を想定できる。

という2点を重点目標とすることで、国語の授業として成立し得るのではないかと考えた。自分とは異なる立場や考えを持つ「他者」を意識しつつ読解・表現できる力を付けさせようとした単元である。

（附属高等学校 若宮知佐）

2. 3. 5. ことばの差異に敏感になる

今回の「国語力」育成への教材として、木下是雄著「日本語の教室」を基に、ことばの表現の持つ微妙な差異について生徒と共に取り組んだ。日本語におけることばの豊かさ、表現の多彩さを味わうことにより、自らもより創造的な言語表現を行う力の伸長をねらいとした。昨今における高校生の語彙力や言語表現力は、論理的思考力や明確に考えを表現する力を重視していく傾向にある様々な社会性に適応するため、幅広い言語経験や、活発な言語活動を主とした実践教育が必要であると考え。内容の具体案として、

- ① 似たような心情表現を表す「思う」と「考える」、「嬉しい」「喜ばしい」などの語彙にはどのようなニュアンスの違いがあるか考察する。
- ② 言語意識を高め、出来得る限り短い言葉で他者の共感を得られるような語彙を工夫し作成、表現する。

以上を踏まえ、高校一年生を対象として実践した。

①については、よく似た言葉の持つ僅かな差異について、感覚では異なることを理解しても、どのような違いかを言語で表現することの難しさを生徒は体感し、様々な意見交換をする中で、より感覚に近いことばを表現していく姿勢が見られた。②については、視覚的効果を上げて生徒の興味を喚起し、活発な意見活動を行う点を目的として、映画の予告を見てPOPを考えるという活動を班ごとで行った。視覚的感動から得られる感情をキャッチコピーというわずかなことばで表現するため、生徒の語彙に対する深い関心を高める点においては一定の効果を上げることができた。

ことばの差異について理解することと、ことばを創造し表現することの指導内容には、体系化すべき点が多くあり反省点は多々あるが、今後の課題としてことばの持つ感覚の差異を、古典分野からも広く単元構成し、なぜニュアンスの違いを感じるのか、どのような違いがあるのか等、分析・追究していきたい。

（都立駒場高等学校 岩瀬華子）

2. 3. 6. 菊池寛「形」を読む～比較を通して表現の特徴を考える～

昨年度までの研究実践を経て、いくつかの問題の検証が提起された。今回の実践ではその中でも、「獲得されたことばの力は、通常の教科書教材を学習することで得られたことばの力とどのような差異があるのか」とい

う点について検証するものである。今回は、教科書教材と他の作品との比較、または文学とその他のジャンル（音楽・映画）との結びつきの影響ということに注目した。具体的な取り組みでは、菊池寛「形」を読み進めていく過程で、時代や設定の異なる作品（吉田篤弘「第三の男“The Thirdman” Theme」）と「比較」することを通じ、表現の効果について「記号性」や「受容者」の関わりから考えていくこととした。

第1段階では「形」と「中身」の関わりについて表現の特徴を考えた。その後、「外部から与えられた意味」という観点から、意味と受け手の関わりに注目した。その際、一つのテキストから考察するのではなく、異なるテキストを手がかりとし、その中で表現される「与えられたもの」に関する記述から、記号的役割が表現される「場」への意識など、異なる視点の導入を図った。また、そこに現れる「言葉」の記号的役割の理解へと結びつけた。

記号性を手がかりに、他の作品を参照することで、表現の効果や機能についてテキスト全体を見直すことに効果が見られた。対象となる文章について印象や感覚といった「個」の面のみでなく、ある「共同性」を意識しながら自らの考えの根拠を明示していくことにつながるといえる。また、意図的にこのような読みの方略を組み込むことにより、「当然」とされていたことについても、外的要因から見直していくきっかけにもなった。

今回の実践では、作品の読みの広がりを見るために「受容の状況」へ目を向けた。また、感覚的に理解され具体化されることの少ない、「今」ということに主体的に向き合った。構造や技法という観点から、「今」身近にあるもの、その背景をつくる積み重なった「過去」、それぞれ魅力についてより深く考えるきっかけとなる。一方で「今」から「過去」への働きかけということについても考えていかなければならない。このような、教材の持つインターテキスト性の活用・効果ということについて、今後さらに検討を重ねていきたい。

（附属世田谷中学校 渡邊裕）

2. 4. 言語生活・言語体系の学習に関する問題点と課題

2. 4. 1. 漢字指導について

〔発達段階に応じた国語力育成のモデルとの関連〕

「国語力」の基盤とされた「語彙力」と直接関連するのが、この「漢字学習」「語の学習」「言語学習」であると考えられる。普段は、文章の中に出てくる「漢字」や「語」の意味や用法を学習するわけだが、ここではそれらを「まとまり」としてとらえ、相互の関係や体系に目を向けさせ、その観点からとらえられるようにする。

しかし、この学習自体も、感性の上に成り立ち、想像力・思考力・理解力・表現力を要求するものであり、また伸張するものであると考える。

〔具体的な場面と力〕

- ・感性 学習したことを基礎とし、日常目にする他の文字や言語に興味を持つ感性
- ・想像力 漢字の成り立ちに思いをはせる想像力
- ・思考力 漢字を分類する思考力
- ・理解力 漢字の説明や、六書についての文章を読解する理解力
- ・表現力 辞書を引き、解字を友達に説明する表現力

〔今後の課題と発展〕

昨年度も指摘したが、漢字で学んだことを、語彙の学習や他言語の学習に応用発展させる力をつける活動が考えられる。2年生では熟語の成り立ちや構成を分類しとらえる力をつけることができる。またそこから体系的な語彙力をつける活動へと発展させる必要がある。3年生では、日本語を表しながら、別の体系を持つ「手話」に注目し、その特徴やしぐみを理解する活動をすることができる。ここから、他の言語をとらえる力

をつけることができるだろう。このような活動を展開していくためには、教師自身が言語に対する感性を高め、生徒が楽しめる教材・学習活動を開発する必要がある。

(附属国際中等教育学校 愛甲修子)

2. 4. 2. 言葉に関する指導について

言葉（日本語）に関する学習は、言語事項などの取り立て指導をしているときは生徒の関心が高まるが、それが終わると関心が薄れてしまう。言葉（日本語）に対する興味・関心を持続させる指導の工夫が必要ではないか。

その方法として、帯单元的な言葉の学習を設定した。具体的な方法としては次の二つである。

- ① 日本語の「今」を伝える話題を示し、自分たちを取り巻く言語環境に注意を向けさせる。
- ② 授業で扱った言葉に関する学習をきっかけにし、その学習を継続・発展させる。

初年度は、2年生を対象に、敬語の指導において②を実践した。敬語の知識に関する指導は授業の中で出来るが、実践の場は教室の外にあるため、正しく使おうという姿勢作りで終わってしまう。しかも、その学習が終わると、生徒の敬語への意識は薄れてしまう。そこで、「敬語は、間違っ使われていることが多い。」という日本語の「今」を伝え（①）、広告のコピーなどから、敬語の誤りの例を継続して探させた。このような学習を組むことで、敬語への関心を持続させ、敬語の使い方に注意する「アンテナ」を育てることを目指した。さらに、これが敬語を正しく使うことにつながっていくことを期待した。

今年度はこの実践をもとに、別の2年生を対象に「ちょっとおかしい日本語を探そう」というテーマで、使い方のおかしい日本語を探させるということを試みた（②）。2年生の冒頭教材が「気の置けない」「情けは人のためならず」を例に、言葉の意味の変遷について扱ったものであった。この学習とそれに続く敬語の学習をきっかけに、この帯単元を始めた。生徒の取り組みと並行して教材に関連した言葉の話題も随時提示していった（①）。

こういった「言葉にこだわる」学習は、どのような国語力を高めるだろうか。まず、言葉に敏感になるということは、国語力の基礎である感性をみがくことそのものといえる。また、言葉の使い方を学び、実際の使い方「ちょっとおかしい」ものを探していくことは、思考力と理解力につながる。さらに、その発見を人に伝え、正しい日本語を示す活動によって、表現力をつけられる。

言葉に関心を持たせるためには、適切な教材と指導時期について指導者自身が研究をしていく必要がある。また、その時々で話題になる日本語の問題点についても、敏感でなければならない。さらに、帯単元として生徒の関心を維持するための工夫も必要である。3年間を見通した指導のあり方を研究していきたい。

(附属国際中等教育学校 石川直美)

2. 4. 3. 音声言語指導から表現指導への実践の進展

本研究の初年度に私は、言語意識を高めメタ言語能力を育成するとともに、実際の会話の仕組みについても意識し、言語表現能力を高めるために、語用論を導入して理論面を学んだ後、それを応用して会話を作成し、役割にして演じる、という授業実践を行った。その際に「指導内容の体系化が今後求められる」ということを、以後の課題とした。ただし語用論には「体系」と言えるものがまだないこと、あるいは、専門的知識の量を「体系化」と称してみだりに増やすことはためらわれた。そこで、単元としての体系化を考え、実施することにした。

本年度（2009年度）の1年生に対しては、まず2学期前半（教育実習期間を除く）に、①高村光太郎の詩を『智恵子抄』から15編程度選んで鑑賞する。そして2学期後半に、②高村光太郎の『暗愚小伝』を紹介し、

③平田オリザ氏の現代口語演劇論を読み、④語用論の学習を行い、⑤平田オリザ氏の演劇『暗愚小伝』の一部をビデオで鑑賞し、⑥戯曲『暗愚小伝』を、語用論ならびに平田氏の現代口語演劇論に基づいてグループで分析を加える。そして3学期冒頭に、⑦これらを踏まえ関連させながら会話台本を作成し、演示する。という内容の単元学習を行った。平田氏の現代口語演劇論は、その中の現代日本語の特徴について言及されている部分を取り上げ、主に語順、主語、助動詞、助詞についての見解を、戯曲や会話の分析に応用させるようにした。

言語について意識し運用する能力は、初年度の実践に比べ高まったものと評価している。また、関連を抜げていく単元構成にすることで、分野や内容を断片的なものにはしないよう留意した。詩と演劇と音声言語を少しずつ関係させながら、総体としての学習者の言語能力を高める方向へ導いて行けたように思う。語用論の内容の深化は課題としてまだ残ってはいるが、言語事項に関する知識と、生きて運用されている言語とをリンクさせることで、興味関心を持って国語力を付けていくことができるという当然のことを、確認することとなった。今後もさらなる発展を図っていきたい。

(附属高等学校 浅田孝紀)

2. 4. 4. 海外帰国児童への日本語の音声言語適応をめざした授業実践として

「自分思いを表そう！～群読発表会～」

海外帰国児童教育学級（以降ゆり組）では、生活経験が異なる子らの共通言語を日本語としている。子どもは、自分も周りも日本語習得を目指し、状況に応じて助け合いつつ学ぶ。教員は、個々の実態を把握し、丁寧な指導で日本語・学校生活の適応を図る。学ぶ子どもの日本語適応段階は多様である。コミュニケーションや発達段階にも違いがある。そこで、共に活動し、相手を思いやる体験の中で、適応を図った。

日本語の節遊びには、「花いちもんめ」「かごめかごめ」など言葉のリズムと動作とを併せもつものが多い。言葉のリズムと動作の楽しさを味わいつつ仲間と遊び、和を広げるようねらった。そして、言葉のリズム遊びから、「みんなで大きな声を出して音読する」とことと「音声言語としての日本語適応」を群読でねらった。

成果としては、“周りの子につられて声を出す”“言葉のリズムの楽しさを見出す”ことを通して、子どもらが心情表現や声の大きさの工夫等の必要性を感じ、自分の学校生活へ生かす姿が見られ、グループ学習の学び合いや良い雰囲気作りにもつなげられた。そして、音読の家庭学習も合わせて活動へ取り組む意欲が高まった子が「やってみたら面白い」とふりかえったり、家庭からも「音読が楽しくなったようです」との声をいただけたりした。

課題は、活動の中で児童の考えや思いを展開することも考えられた点と、グループの組み方で活動が左右されてしまい、実態と合わないグループが出てしまった点である。

(附属大泉小学校 岩浅健介)

2. 4. 5. 帰国学級における「話す」・「聞く」について

国語力の向上の実践として、海外帰国児童教育学級を対象に、目的に応じて相手に伝わる表現をする学習を行った。活動としては、①絵に描かれた犬の特徴を相手に伝える際に、「犬を相手にもらって欲しい場合」と「犬を探して欲しい場合」のように目的に応じて伝え方を変える活動。②リンゴの絵が模様で描かれたバッグを説明し、聞いた相手が同じ絵が描けるように話す順序や、方向など相手の立場になって伝える活動を行った。

海外帰国児童の実態として、書く活動では参加しにくくても、話すことならばできる児童が多いため話して伝えるという形をとった。

その中で、目的に応じて伝える方法は分かっているが伝える語彙を日本語でもっていない児童もいれば、目的の伝え方も伝える語彙のどちらも獲得していない児童もいた。その段階の児童には絵自体をを説明し伝えるという活動の前段階として、絵を見る中で気づきや語彙を増やしてから活動に取り組む方法が効果的であったと思われる帰国児童で言葉を扱う学習を行う際には、とくに児童一人一人の日本語の力を事前に把握し、手だてを細かくして個別の課題に合わせた指導を行っていく必要があった。

また、どうしても日本語での言い方という型にはめてしまう部分も出てきてしまった。児童によっては母語であれば一つの見方や言い方にとらわれずにもっと豊かに表現することができた児童もい他と思われる。そう考えるとまず母語で考えさせてから日本語を対応させていくことでより効果的な学習になったと考えられる。児童の実態に合わせた言葉の学習方法を今後さらに探していきたい。

(附属大泉小学校 表賢司)

2. 4. 6. まとめと課題

「言語体系」の学習に関連して、例えば語彙力の育成を考えた場合、それは、語彙についての知識・理解を深めていく方向の力と語彙を習得していこうとする方向の力との二つに大別できる。前者は、個々の語句についての意味理解を伴いつつ語彙の体系への理解を深めていくものであり、後者は語彙を自身の力で習得していくための方法知やそれに裏打ちされた関心・意欲に関わるものである。一般的に「語彙を増やす」という言い方は、知っている言葉数を増やすというイメージで捉えがちだが、それを「語彙力を高める」という学習指導の面から考えた場合には、その数量的な変化を支える力として、先の二つの力を育てる必要がある。

そうした観点からすると、「言語体系」の学習指導の課題点としては次の点が指摘できる。

- ・「言語単元」の設定 … 言葉について総合的に学ぶ単元を設定する必要がある。文章を読む際に意味調べなどをしながら個々の語句の意味充足を図っていても、それだけでは「体系」への気付きは生まれない。「言語体系」への気付きを学習の核においた単元設定が求められる。
- ・授業デザインの工夫 … 「言語体系」について扱う単元では、協同学習における気付き合いを通して言語に関する様々な知識を深めていくのと同時に、自身の力でそれらを習得していくことが可能になるような方法知を学ぶ必要がある。そのためには学習指導過程がポイントになる。学習の過程がすなわち習得の過程になるように、単元および授業をデザインしなければならない。

「言語体系」への理解を深めることは、日常の言語行為をメタ的に捉える認知力を児童・生徒が高めていくことにつながっていく。そして、そうしたメタ認知力の高まりは、自分たちの言語生活を捉え直していくことにも直結する。「言語体系」の学習指導の工夫は、そのまま言語生活の学習指導へとつながっていくのである。

(大学 中村和弘)

2. 5. 読書活動・情報活用と「国語力」の関連についての授業実践研究

2. 5. 1. 学校図書館を使いこなすための授業単元

読書活動・情報活用という視点で研究を進めてきた。学校図書館との連携や、図書資料の活用などを意識した単元づくりに取り組んでいくなかで、子どもたちが日常の読書活動で身につけていく力と、授業でこそ身につけさせたい力とがあることが見えてきた。

授業を通して身につけさせたい力とは、『学校図書館を使いこなす力』である。学校図書館は、蔵書数や場所、貸し出しの方法や掲示物など、学校によって様々である。その学校の図書館ではどんなことができるのか、どう使えば自分のやりたいことができるのかなど、子どもたちが「自分たちの学校図書館」を使いこなす術を、我々は子どもたちに教えていかななくてはならないのである。

昆虫について調べたいときには昆虫図鑑。言葉の意味を調べたいときは国語辞典。偉人の生き方を学びたいときには伝記。そういった図書に関する知識をどう活用させるか、これこそ日常の読書活動だけでは十分ではなく、授業という場でこそできる活動である。

今後は、図書資料の活用という視点よりも、少し広い学校図書館の活用という視点での授業づくりが必要になってくると考える。そしてその授業単元の中で、子どもたちに学校図書館の楽しさというものも伝えていきたい。なぜなら、学校図書館を使いこなす子どもの姿を、その先に期待できるからである。

(附属世田谷小学校 福田淳佑)

2. 5. 2. 「ファンタジーを味わおう」

東京学芸大学附属竹早小学校 平成21年7月1日(水) 第5校時 6年1組 39名 指導者 浅見 優子

(1) 単元名「ファンタジーを味わおう」 教材名「きつねの窓」 安房 直子作 (教育出版 6年下)

(2) 単元の目標

- ファンタジーというジャンルを「きつねの窓」の読み方を基に、他のファンタジー作品を楽しく読む。
- ◎ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。
- 比喩などの表現の工夫に気付くことができる。

(3) 学習計画

- ①初発の感想をもとに、学習計画をたてる。(3時間)
- ②手がかりになる言葉を見つけ、「ぼく」の気持ちを考える。(5時間)
- ③ファンタジー作品を読み、読書座談会を行う。(3時間)

(4) 図書館との連携

「きつねの窓」を学習したあとに、他のファンタジー作品を数多く読み、ファンタジーの読み方をより確かな力としていきたいと考えた。そこで、単元の終わりに、読書座談会を設定した。読書座談会とは、読んだ本についての感想を述べ合うことで、作品の読みを深めていくことをねらいとしている。この読書座談会で子ども達に読ませるファンタジー作品の紹介をお願いした。

まず、「きつねの窓」の作者、安房直子さんの他の作品を集めていただいた。「花豆の煮えるまで」「ライラック通りのぼうし屋」「おしゃべりなカーテン」安房直子 講談社などが教室に届いた。これだけでは人数には足りないなので、他の作者のファンタジー作品を紹介していただいた。「雪わたり」「虔十公園林」宮沢賢治 岩崎書店、「霧のむこうのふしぎな町」「地下室からのふしぎな旅」柏葉幸子 講談社、「つみきのいえ」平田研也 白泉社、「霧のむこうのふしぎな町」柏葉幸子 講談社、「トムは真夜中の庭で」フィリパ・ピアス岩波書店などである。

こうした作品の中から自分の読みたい本を見つけ、友達の勧める本を読んだ。感想を交流し、自分とは違う意見に出会うことによって、自分の読みを修正したり、深めたりすることができた。

(5) 成果と課題

- ◎40冊以上の本が集まり、一人一人が自分から読みたいと思える作品に出会うことができた。
- ◎大人向けの小説、それも推理小説やホラー小説、携帯小説を読んでいた子ども達がファンタジー作品に出会うことで、子ども向けの作品も楽しく読むようになってきた。さらに、司書から一人一人の子どもの興味・関心にあった作品を紹介してもらい、読書の幅が広がった。
- 図書室との連携を継続し、子どもの読書指導に取り組む。

(附属竹早小学校 浅見優子)

2. 5. 3. 「私のおすすめのこの1冊」

(1) 単元名 「私のおすすめのこの1冊」

(2) ねらい

- 自分の選んだ本の魅力を分かりやすく紹介するために、スピーチの内容を考えることができる。
- 聞き手に興味をもたせるために、内容や方法を工夫してスピーチをすることができる。

(3) 単元計画（帯単元）

- 1次 ・本の紹介するときの項目について話し合い、自分の選んだ本に合った項目を選んでスピーチメモを書く。
- ・スピーチメモをもとに、スピーチの練習をする。
- 2次 ・朝の会で日直の話として、「私のおすすめのこの1冊」のスピーチを1日2人ずつ行う。
- 3次 ・自分のスピーチの内容や方法と、友達から紹介された本の感想についてふりかえりをする。

(4) 図書館との連携

単元の最初から、図書館司書の吉岡先生と話し合いながら単元を作った。我々指導者の思いとして、友達から紹介されることで、普段あまり手に取ったことがないジャンルの本を読むきっかけになればいいと考えた。そこで2つの手だてを講じた。

- ①児童が選んだ本を事前に調べて一覧表にまとめ、司書の協力を得て同じ本を用意して一定期間学級文庫として自由に読めるようにした。
- ②朝の日直のスピーチテーマを「私のおすすめの本の紹介」として、毎朝実施した。そして、それを聞いて興味をもった本を自由に借りられることにして、その際是一覧表に記入することにした。

(5) 成果と課題

- ◎自分の紹介する本を選ぶ過程で、児童は自分のこれまでの読書生活を見直すことができた。
- ◎一覧表の貸し出し状況を見ることで、児童が自分の選んだ本やスピーチの善し悪しを自己評価することができた。
- ◎友達の紹介スピーチによって興味をもち、これまで読んでことのないジャンルの本を手取るきっかけとなった。

「●●君が紹介しているから、読んでみよう。」「案外、こういう本も面白いな。」

- ◇おすすめする本の選び方を徹底することができなかった。その結果、新しいジャンルに挑戦した中から本を選んだ児童は成果を上げたが、あくまでもお気に入りの読みやすい本を選んだ児童は、自分や友達のジャンルを開拓することにはつながらなかった。今後第2回を行うのであれば、児童が司書の吉岡先生に相談する時間をゆっくり取り、紹介する本をよく吟味してから選ばせることが大切だと考えている。

(附属世田谷小学校 井上陽童)

2. 5. 4. 読書ポスターのとりくみ

読みの成果を他の本にも還元することを意識し、中学二年生で読書ポスターの作成に取り組んだ。中学段階になると自分の好みが決まり、読書量の面での「深まり」が見られる生徒は多い。一方で、経験の関連づけなど読書の「広がり」ということは、日常の読書生活だけでは難しいものである。そこで今回の実践では、「近代文学」に親しむとともに、それをもとに「現代」の魅力を考えることを目標にした。漫然と「読書」に向き合うのではなく、観点を定めて二つの作品を捉え、関連する事柄を調べてみることで、作品の魅力を多角的に捉え、自分なりの結論に結びつけていくこと（読書経験の関連づけ）を目指した。

今回の実践は、大きく次のような活動によって構成される。①「近代」「現代」の本を読み、選んだ作品に関連する事柄について、図書資料を主に〈情報〉の収集をする。②調べた〈情報〉を作品と関連づけ「分析」する。③「近代」の特徴を比較の軸にして、関連性・連続性を踏まえて〈評価〉する。さらに各々の段階で、「相手意識」を持つ（読み手を想定し「伝える」ことを意識する）ことを意識付けた。

今回の活動では様々な場面で図書館との連携を図り、その影響が見られた。作品の関連性を考えるという主体的な取り組みには、生徒自身が興味を抱き、「自らの力で」選択することが重要である。そのため、任意で選んだ作家について図書館にコーナーを設置し、日常的に目に触れ、手にとれるようにした。また選択の幅が限定されすぎないように、多くの図書を準備した。さらに調べ学習を行う際には、作品案内・作家紹介を含む数多くの資料を提示できるようにした。基礎的な資料が共有され、土台ができることで、図書館の文学関連以外の棚に目を向け目を向け、踏み込んだ情報収集を行う様子も見られた。

これらのことから、日常的に読書に親しんでいる生徒は、新たなジャンルの面白さに気づいたり新鮮な発見の喜びを感じている様子が見られた。一方であまり本を読まない生徒は、関連づけという点に難しさを感じていたが、学校司書や教師に相談したりすることで、発見の喜びに結びついた。また、「相手意識」ということを具体化してレポートを書くことで、根拠の明示ということに意識を向けられ、引用や参考文献の扱いに関する意識付けができるようになり、今後の活動への効果が期待できる。

学校図書館だからできる、特定の事柄の図書資料の深化という点をいかに活用するか。そこでの生徒の状況に対応できる教師の力の向上、学校司書との連携を具体化する取り組みが今後の課題となる。

(附属世田谷中学校 渡邊裕)

2. 5. 5. 問題点と課題

実践を振り返り、次のような問題点と課題を整理することができる。Cグループでは、「読書活動」という視点から実践とその検討を重ねてきた。結果として、内容としての「読書」をどのように考えるのか、活動として調べたり、創作したりする「体験」だけでよいか、結果として「読書」のどのような種をまいたことになるのか、整理する必要がある。「読書」も絵本から活字の多さ、読書の量という物差しではなく、一人ひとりの成長を支える「読書」としての視点をあらためて考慮しなければならない。さらに「読書」の交流を目的としたシステムの開発を手がけたが、当たり前のこととして人的、物的の環境整備が整うに連れ実践がしやすくなってきた。

(附属世田谷中学校 笠井正信)

3. 今年度（最終年度）の成果と今後の課題

本学の附属小学校、附属中学校、附属国際中等教育学校、附属高校学校、さらには私立小学校・大学の教員と本学学部の教科教育学及び教科専門担当教員とが連携し、「国語力」向上を図るカリキュラム開発に取り組んだ附属学校研究会プロジェクト研究の第3年次（最終年度）の報告である。研究の目的はもちろん「国語力」向上を図るカリキュラム開発であるが、そのカリキュラムを教員養成や現職研修のカリキュラムに関連付けることまでも視野に入れた研究である。

第1年次は、各グループごとに先行研究や実態調査等を基に、「国語力」を分析し、「国語力」という観点から児童・生徒の課題を捉え、教材選定、単元構成などの授業実践を構想した。

第2年次は、前年の授業実践構想を踏まえて各グループが授業実践を公開した。そして、授業実践によって顕現化した「国語力」向上のための課題を各グループごとに検討した。

第3年次の今年度は、最終年度に当たる。学力・評価グループが作図した『発達段階に応じた「国語教育

における重点の置き方』イメージ図及び『学年発達段階に応じた「国語力」(国語教育の重点の置き方)イメージ図の具体化案』をもとに、グループのこれまでの実践研究をまとめ、さらに授業実践を重ねるなどして、「国語力」向上と教師の授業づくりの力との関連性について評価・検証をした。

各グループの取り組みについて紹介しよう。学力・評価グループでは、平成16年2月3日の文化審議会答申をもとに作図した『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方』のイメージ図の改良を重ね、その上で、各グループの「国語力」向上を図る授業実践の評価・検証のための一つの基準として『学年発達段階に応じた「国語力」(国語教育の重点の置き方)イメージ図の具体化案』を作成した。古典グループでは、高校の各学年でさらに授業実践を重ね、とりわけ高校においては、古文と漢文、古典と現代文で関連を持たせた授業を行い、対比をすることで、それぞれの本質を深く掘り下げる新たな「気づき」のある授業ができることを検証した。

現代文(文学、批評、評論)グループでは、第2年次の授業実践で捉えた課題を踏まえ、中学校、高校の各学年において授業実践を重ね、価値ある思想やテーマが難解さの奥に秘められている教材を開発し、単元を構想をし、授業実践をすることを評価・検証した。言語生活・言語体系グループでは、漢字指導、言葉の指導、音声言語指導から表現指導へ、海外帰国子女学級の指導と、幅広い評価・検証を行った。読書活動・情報活用グループでは、多様な読書活動を実践し、読書が及ぼす児童・生徒の成長の在り方について検証した。

最後に、成果と課題。

本研究では、「国語力」の向上を図るための小学校から高校までの12年間のカリキュラムを提言することができた。しかし、教員養成や現職研修のカリキュラムに関連付けることまでは不十分であった。本研究のこれからの課題であるといえよう。

(大学 大熊徹)

学年段階に応じた「国語力」(国語教育における重点の置き方)イメージの具体化案

学年段階	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1国語総合	高2・3現代文B(古典B)など
表現力	進んで表現する力		工夫して表現する力		適切に表現する力		考えをまとめて表現する力		考えを深めて表現する力	相手と目的に応じた的確に表現し伝え合う力	目的と課題に応じた論理的・創作的に表現し伝え合う力
理解力	楽しんで理解する力		幅広く理解する力		考えを広げ深めて理解する力		ものの見方や考え方を広げる理解力		自己を向上させる理解力	表現内容・表現形式に応じた的確に理解する力	古典を含む広範な言語表現を理解する力
思考力	順序や構成を考える力		ものごとの中心や部分相互の関係をとらえる力		目的に応じて情報を持つ力		多様な方法や手段を駆使して情報収集につとめる力		論理的な展開や構成をとらえ周囲を説得する力	文章や談話に関し内省的・評価的に考える力	表現・理解すべき内容の的確に意識し批評できる思考力
想像力	場面の様子を想像する力		人物の気持ちやその変化を想像する力		優れた叙述をとらえる力		優れた叙述や表現を構築する力		作品や事象の確にとらえ批評する力	一般社会における読書生活・談話生活に对应できる想像	字句・芸術の担い手として必要な言語的想像力
語彙力	言葉のまとまりや言葉の響きをとらえる力		事実を正確にとらえる言葉の力		目的や機能に応じて使い分けられる言葉の力		系統的・体系的にとらえる言葉の力		言語文化を支える言葉の力	社会における言語生活の基礎となる言葉の力	言語文化の継承と創造の基礎となる言葉の力
感性	言語活動を楽しむ意欲		一人ひとりの言語生活の交流を図る態度		自分の考えや思いを語ることへの関心や意欲		課題追究や解決のため積極的な態度		自身の言語生活を振り返り改善していく態度	豊かな心情、磨かれた言語感覚、言語文化に対する高い関心、国語を尊重して向上を図る態度	もの風方・感じ方、考え方を広く深いものにし、読書や言語文化への関心を深めることで、国語の向上を図り人生を豊かにする態度

言語生活の広がり	身近なことや経験したこの世界	調べたり聞いたりして広げた世界	資料や情報をもとにした世界	日常生活の中でさまざまな立場や考え方の違いをふまえた世界	社会生活の中で調べたり聞いたりして広げた世界	日常生活の中でさまざまな立場や考え方の違いをふまえた世界	国際的な世界、および生涯にわたって国語を尊重し向上を図る世界
話し聞く・書く活動	話し活動	話し聞く・書く活動	話し聞く・書く活動	話し聞く・書く活動	話し聞く・書く活動	話し聞く・書く活動	話し聞く・書く活動
事物の説明	楽しみ想像しながら読む	物語や詩の感想を述べ合う	資料提示で説明や報告	日常生活の中の話題についての報告や紹介	調査に基づく説明や発表	調査に基づく説明や発表	状況に応じたスピーチ
経験の報告	読み聞かせ	調べた文章を利用する	調べたことで詩論	対話や討論	文章と図表の関連を読む	説得のための弁論	資料に基づく説明
想像を書く	演じながら読む	文章をまとめたものを読み合う	詩や物語	鑑賞文	問題に基づき意見を述べる	批判	課題に応じた話し合いや討論
観察の記録	生観み・説明した文章を読む	紹介したい本を取り上げ説明する	調べた報告	図表を用いた文章	意見文	文集の編集	詩歌や随筆を書く
簡単な説明	文章を読んで感想を書く	必要な情報を得るために関連した本を読む	編集	行事等の案内や報告	社会生活に必要な手紙		引用して説明や意見を書く
紹介のメモ	読んだ本の好きなところの紹介	資料を使った説明	よさを伝える文章				自己評価や相互評価を通して役立て自分を豊かにする
手紙		依頼状や案内状・礼状					脚本化や書き替え